

毎年、大晦日になると、この目の前の道は、初詣客で、身動きも出来ないほど、人が一杯になる。

僕もかすかに父親に肩車してもらいこの祇園の八坂神社の中をお参りに行った事をうっすらと覚えてる。

ろうそくの火が一杯だった。

あの時のざわめきが聞こえてくる様な気がした。

僕もいつか結婚し、子供が出来て、この八坂神社の石段を子供を肩車しながら、登り降りする時が来るのだろう。

そして、また、僕の子供が大きくなると、僕の子供も、同じように自分の子供を肩車して、この八坂神社の石段を登り降りするのだろう。

そうして、何世代も、時が流れ、今、僕が、ここに存在し、

思い、悩んでいることなんか、

誰も知らないようになるのだろう。

時間の流れとは、そんなものなのか。

まあ、それも、仕方のないことかあ。なんだか、もの悲しく、虚しくなる思いだった。